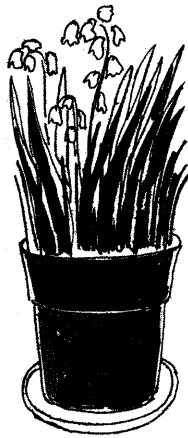


新しい年度がはじまるにあたって

村石 京



四月、日一日と木樹の緑が色濃くなり、花のつぼみが鮮やかにほころびる季節となりました。昨日まで地面の下で蹲っていた小さな草が、野山に一せいに緑のじゅうたんを敷きはじめ、それを見て冬の間はひっそり静まっ

ていた鳥や虫たちも嬉しげにあちこちに姿を見せはじめます。じっと時をまって貯えておいたエネルギーを紐といたような自然の営み、身近な動植物の変化に目を見るような思いもしたりする季節です。

そして四月には、日本においては学校や社会などでも、新しい年度がスタートを切ります。電車の中では、今までの学生服を背広に着替えて緊張した面持ちで通勤するフレッシュマンに出あうのもこの頃です。また、掌中の珠を手離すような思いで三月の卒業期に送り出した卒園児たちが、一年生になって真新しい制服制帽に身を固めて晴れやかに幼稚園を訪れたりして、その成長の姿をまぶしいような思いで見つめるのも四月のことです。

さてこの時期、幼稚園の現場の様子はどのようなでしょうか。そして私も保育者は、どのようなことを心していくことが必要なのでしょう。

○出あいを大切に

新しく入園期を迎えた子どもたちは、今まで生活していた家庭の中から、幼稚園という社会へ、集団生活へと環境が変化します。幼稚園はどこなところだろう、どんな先生だろう、どんな友だちがいるのかしら、子どもたちの胸の中は、期待と不安で一杯なことだと思います。

その子どもたちを優しく迎えて、暖かく包んであげるのが、私も保育者の大きな役割だと思います。幼稚園では母親に代る役割をとり、子どもの気持を充分にくみとり、子どもの望むことを満たすところから先ず出発していきたいと思います。

幼稚園は子どもにとって初めての新しい社会であり、集団生活の場です。しかし集団訓練の場ではありません。一人ずつの子どもたちが伸びやかに十分に自分を出して行動し、そして他と円滑な関係をもちながら過ごせる場でありたいものです。子どもの夫々が、名前や顔が違うのと同じく、性格も違うし、発達の程度も違うし、望んでいることも違います。子どもの個というものを考えないで、子どもの年令のわくや基準というものに目がいってしまうとしたら、ある年令の級グレイドというものは存在しても、一人一人の個というものはその中では薄れてしまふでしょう。私たち大人が、一人ずつ全く違った人格をもった人間であるのと同じように、子どもも各々が異なった個性をもった人間なのです。その一人ずつの出

あいが、四月に行なわれます。不安と緊張ではりつめて
いる子どもの気持を、しっかりと受けとめることから
始めていきたいものです。

元氣一ぱいで毬のように弾んでいるA夫、引込思案で
気が小さく遊びになかなか入れないB夫、明るく伸び
びしているけれど落ちつかないC夫、お母さんと離れ
られないで泣くD子、あれもこれもとやっては次々と放り
出している移り気なE子、友だちと遊ぶことが嬉しくて
すっかり興奮してしまふF子、用心深くそうと一歩ず
つ確めるように行動するG子、級の子どもが三十人い
れば三十通り、三十五人の級なら三十五通りの性格をも
つた子どもたちがいます。この子どもたち一人一人に合
わせた保育をしよう、こんな心から子どもとの出あいの第
一步はふみ出されるのです。自分の考えていることや、
求めていることを言葉や行動に現わす子どももいれば、
まだ表現しようとしないう子どもも入園当初には見られま
すが、一人ずつの気持を知り、その望むところを満たし
ていくことから、子どもと保育者の絆は始まると思いま

す。もし保育者がこの心を忘れて、保育の場において早
くから園側の教育目標やねらい等を前面に出すならば、
子どもはそれに合わせた行動をとるように要求されるで
しょう。園の生活というものには、勿論それなりの規律
は必要ですけれど、子どもにとって多くのことが要求さ
れたり、制約があったりして、それに合わせていく場な
のではなく、自分のやりたいことが出来る場所であ
り、自分の気持が満たされる場であることが基本であり
たいと思うのです。こういった子どもを中心とした園の
生活が約束され、保育者との関係がつけられるならば、
子どもは安心して自分の気持を現わし、やがて安定した
落ちついた心をもって伸び伸びと遊んだり、行動したり
出来るようになっていくと思えます。そしてこうした日
々の中では、自ら保育者との間には強い信頼がつけられ
ていきます。そうした意味で、先ず最初の子どもの出
あいを大切にし、充分に相手を受けとめ、認めていくよ
うな関係をつくっていききたいと思います。

一方ではまた、保育者と子どもとの出あいと同じよう

に、子ども同士の出あいも大切なものもっています。幼稚園の中でつくられた初めての友だちが、その子にとって一生涯の友だちとなる場合もあります。幼稚園での生活が、いつしか人間同士の絆をつくるものになることも多くあります。保育者は、はじめは淡い子ども同士の出あいも、次第にそのかわりを深め、強いものとなっていくことが出来るようにと、常に後循になって支えながら、子ども同士の関係を大切に育てるようにしたいものです。

○環境づくりを大切に

年度代りには、新入の子どもを迎える級は勿論のことですが、四歳児、五歳児の級でも夫々進級し、子どもも大人も張り切っています。子どもは嬉しく弾んだ心一ぱいですし、保育者としては新年度の抱負や思いがたくさんに漲っていることと思います。前年度のことをふり返ってみますと、四月の思いとは裏腹に実現しえたことはほんの一にぎりしか充たない状況にがっかりしてしま

うことも多いのですが、不思議と新しい年度を迎えるときになると、今年こそはという気持ちが湧いてきて、子どもたちと同じように明るく前向きな心になってきます。これが学校生活の中における大きなめりはりともいえるものなのでしょう。年度のはじまりとしての四月の月には、自分を見つめなおす機会をもったり、新しい年度の計画を練ったりしながら、初心に立ちかえる折としていきたいものです。

そしてさて、四月の子どもたちを迎える現場は、子どもたちが気持よく楽しく園生活を送ることが出来るようにと、先ず第一によりよい環境づくりをすることから仕事をはじめります。個人個人の小さな名札づくりから、部屋のしつらえ、遊具の配置など全てが子どもを迎えるための大切な環境づくりです。新入や進級を祝うため、明るい雰囲気であか子どもたちを迎える準備をしているとき、新入の子どもたちがおずおずと母親に手を引かれて来る様子や、あるいは元気よく部屋の入口に入ってくる姿が想像されたりします。そしてまた、年長組にな

って嬉しくて飛ぶように入ってくる子どもの顔が思い浮かび、こちらも心が弾んでくる思いがしたりします。部屋の中ばかりでなく、園の玄関や園庭などにも春らしい草花を植えたり、小動物を飼ったり、遊具を整えたりして、園全体に新しい年度がはじまる準備をし、子どもたちを迎え入れるよい保育環境をつくっていくようにしたいものです。

このような目に見えた環境づくりが充分行なわれることの大切さは、今更いうまでもありませんが、物的環境とともに重要なことは人的環境です。園によっては新しい保育者が加わって、にぎやかになったり新鮮になったり、あるいは多少不安であったり緊張している場合もあるでしょう。子どもを迎える環境として大切な保育者の役割を思うとき、職員間の人間関係の和もまた、大きな礎となります。夫々が相手の立場を思いやり、相手を尊重しあい、そして各々がよく自己発揮することが出来るような職場環境をつくることにより、保育者の子どもに向ける心も安定し、ゆとりを持つことが出来ると思いま

す。ごくしゃくした人間関係や競い合う気持では、子どもたちの中におだやかな優しい心は育っていかないでしょう。保育者間に相手を認め合う気持や、他を大事にする心があつてこそ、子どもにも映し出されていくものとなると思います。お互同士相手をよく理解しあいながら、夫々のもつ良さの中で学びあつて進んでいくような関係でありたいと思います。

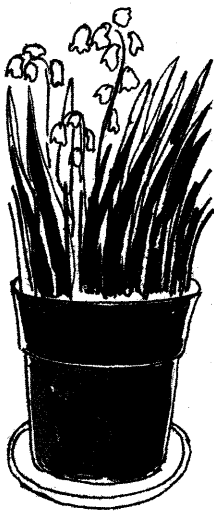
そしてもう一つ、人的環境として大きな位置づけをとっていくのは、新しい子どもを迎え入れる在園の「子ども」という存在です。一年間あるいは二年間の在園期間によって、すでに幼稚園の生活環境によくなじみ、友だちとの関係も安定し、規律も身につけられるようになってきた年長児の姿は、新入園児やその母親達に与える影響も大きなものがあります。そして年長児たちが優しく新入園児をいたわり、一緒に遊んでいる姿は、まことに心暖まり、頼もしいものです。先輩としての年長児たちが、自然に新しい仲間を思いやりもって迎える気持を持つるように、そしてまた、園の中に流れている文化とい

うものが、今年もまた遊びを通して伝えていくことが出来るようにと、保育者は日常生活の中で充分な心配りをしていくようにしたいものです。

○ゆとりの心を大切に

新入園児を迎え入れるときには、夢や期待が一杯あります。今年がああもしたい、こうもありたいと思うのですが、その思いが強い程現実との落差に出あって、がっ

かりしたり、落ちこんだり、あせったりする場合があります。と思います。しかし、新年度の混沌とした状態を抜け切り、安定したものに移行していくには、子ども自身の成長と、保育者のたゆまない努力と、時間の経過とが、重なりあって成り立っていくものだと思います。日々の積み重ねを大切にしたいものです。自分の思った通りの保育をしようとしたら、計画通りの毎日を送ろうとしたのでは、保育者の思いばかりが前面に出て、肝腎の一人一



人の子どもが見えなくなってしまうでしょう。級のまともをあげたりすることなく、ゆったりと子どもを成長を見守っていくようにしたいものです。これにはあくまでも、ありのままの子どもを受けとめ、子どもに合わせた保育をするという保育者のおおらかで柔軟な姿勢が基本となります。子ども一人ずつを知り、充分把握し、子どもの伸びる力を支えていく保育をしたいものです。

私どもの役割は、子どもが成長していく過程において、一人一人の子どもがよりよく伸びることが出来るように見守ったり、手助けしたり、支えたりすることにあると思います。教育には「薫陶」という言葉があります。が、保育の成果も一か月や二か月で現われるような単純なものではありません。幼児が人間として育っていく中で、私どもの行なっていたことが、どこかで、何かでその子にとって役立つものがあつたならば嬉しいものだと思います。幼児期というものは、将来の成長の中で長い期間かけて実るものの下地をつくったり、これから伸びていく芽を大切に育てていく時期なのだと考えており

ます。

目の前に見えたことだけで早急に子どもを判断したり、解釈したりすることなく、広いゆとりの心をもって暖かく包んでいくようにしたいものです。そして子どもは成長を待つ心を忘れないようにしたいと思います。このような保育者との出会いがあるならば、幼稚園とは子どもにとって本当に楽しい、そして望ましい場となるのではないのでしょうか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)